

献つせることのの幸せ

祖母に見守られて

野の中なかともよ

(ジャーナリスト)



今でも、目を閉じなくても、すぐそこに。いえ正確に言えば、いつでも、ここに、私の中に彼女はいてくださる。大好きなおばあちゃん、母方の祖母である。もう亡くなってから二十年以上になる。最後は一年近くの闘病入院生活であったけれど、実に美しいお顔で、静かに旅立っていかれた。

完全看護の近代的病院でありながら、兄弟姉妹七人がシフトを組んで、母親のために毎晩寝室で寝泊まりを続け、翌日の午後バトンタッチする。私の母は、上から三番目。叔父も叔母も、もちろん各々の家庭を持っている。ある叔父は、住まいのニューヨークから定期的に病院通いを続けていた。床擦れ防止にはこれがいい、とドイツから専用ベッドを取り寄せたり、流食の時期になると、NASA（アメリカ航空宇宙局）

から、特別ルートで宇宙食を調達するなど、その献身的な母親への愛は信じ難いほど強く熱いものがあった。意識が朦朧もろろとしてはじめても、院長回診の声を聞くと「身づくろいはきちんとしていますか」と、自分で襟元えりもとをなおそうとする、凜りんとした祖母。でも、最後まで、いつでも微笑ほほえみをたやさない聖女のような女性でもあった。

三男四女の献身の愛と、祖母の生き方を貫くものの中には、きっと仏さまへの信心があったのだと思う。決して狂信的であったり、排他的であったり、強制的であったりはしない。自然体での信心である。

祖母は幼い私に、いつも楽しくわかりやすく語りかけてくれていた。おばあちゃんのお家にお泊まりすると、毎朝仏前でのおつとめのお支度係しだんは私になる。切

り子のクリスタルに注意深くお水を注ぎ、プーンと香る極上の一箱茶をおじいちゃんのお写真の前にお供えする。もちろん、炊き立てのごはんも小さく盛って。おロウソクとお線香に火をつけると、私は、おばあちゃんの後ろにチョコンと正座をする。



「仏さまと神さまはケンカしないの？」
「きつと、とても仲良しだとおばあちゃんは思うわ。合掌をするのは、お空の上にいる仏さまや神さまに、願いをかけたリ、助けを求めたり、ということよりも、お人とお人の心の中に住んで、見守ってくださいている仏さまたちへの感謝のごあいさつなの」

「合掌。おはようございまーす」
今日も暖かく私たちを照らしてくださるお太陽さまへの感謝にはじまって、祖母の短い読経がある。深い緑のお線香の香りと、やさしい祖母の声に包まれる。この朝の短い空間が、私は大好きだった。

「にーじーせーそんって、そのお経の意味はなあに？」
「そうね、まだ少しむずかしいと思うけれど、そうやって、ともよちゃんが、お手てを合わせて仏さまや、いろいろなたちに、ありがとうございますって、心に思うだけで、素晴らしい意味になるのよ。小さいうちは、お耳じゃなくて、毛穴を通して、あなたの心と身体にしみ込んでいくのね」

ひとつひとつの会話が、今も鮮明せんめいによりがえってくる。感謝する心の大切さ。自然への愛。弱い者への慈しみ。そして、献すること、献せることの幸せ。青春のころ、「たくさんの信心のあり方を知るのもいいことよ」と教会を訪れることさえ勧めてくれた。

憶い出を連ねれば、枚挙まいきよにいとまがない。今年もお盆がやってくる。慌ただしい毎日の中で、季節の墓参りもままならない不信心な私だが、世界中どこにいても、いつも祖母はあのやさしい笑顔で見守ってくれている。

おばあちゃん、ありがとうございます。

仏教の生活

平成8年夏
お盆号・175

